



## 医学部の国際交流

医学部長 西 岡 安 彦

令和4年8月2日(火)、モンゴル国立医科大学のフレルバートル学長とシーレヴニャンバ大学院長が徳島大学を訪問され、大学本部で3回目となる大学間協定更新のための調印式が執り行われました。その後、蔵本キャンパスで各学部やセンターの教育・研究施設を視察され、モンゴル出身留学生等との懇談会が開催されました。懇談会には現在医学部で研究を行っている9名のモンゴル出身大学院生と1名の研究員が集まり、留学生から研究発表が行われ、フレルバートル学長から学生に向けて激励の言葉をいただきました。

モンゴル国立医科大学との国際交流の歴史は古く、その始まりは平成7年の総合診療医学分野（当時は呼吸器・膠原病内科学分野）の谷 憲治先生の米国 National Institute of Health (NIH) 留学から始まります。谷先生の留学中の柔道(+研究)仲間であった National Cancer Institute (NCI) の Arya Biragyn 博士の妹さんである Yanjmaa Biraa 先生が平成13年にモンゴルからの初めての留学生として徳島大学に来られました。平成14年から医学部長を務められた曾根三郎先生の下で、平成17年にモンゴル国立医科大学（当時はモンゴル健康科学大学）と学部間学術交流協定が締結されています。その2年後の平成19年から、歯学部および薬学部との交流が始まると共に大学間協定に格上げされました。現在までに50名以上のモンゴルからの留学生が徳島大学の大学院で学位を取得され、モンゴルで活躍されています。医学生との交流プログラムとして、毎年相互に訪問しての「サマーセミナー」も継続しています。

また、平成29年から国際協力機構（JICA）の「日本モンゴル教育病院運営管理及び医療サービス提供の体制確立プロジェ

クト」を受託し、徳島大学医学部・病院が愛媛大学医学部・病院と協力し、苅原 稔前研究部長を中心に支援を行ってきました。首都ウランバートル市内にモンゴル国立医科大学の大学病院として日本式管理システムを持つ地域中核の総合病院かつ教育病院を整備する国家プロジェクトです。

一人の研究者の交流から始まった国際交流が25年以上の歳月を経て、徳島大学医学部の国際交流の中心的位置づけにまで発展してきたことに感銘を受けるとともに、小さな、しかし可能性のある芽に気づき、しっかりと栄養を与えつつ地道に育てていくことの大切さを実感しています。徳島大学医学部では、モンゴル国立医科大学に加えて、テキサス大学(米国)、ハノーバー医科大学(ドイツ)、ソウル国立大学(韓国)、メトロポリタ応用科学大学(フィンランド)などの学術交流協定校への海外短期留学を実施するとともに、様々な形での海外留学への挑戦をサポートしています。

海外留学の形は様々ですが、語学研修としての意義のみならず、海外で生活することで得られるものは計り知れないくらい大きく、人生の糧となることでしょう。研究留学などにおいては、海外とのヒューマンネットワークの構築に加えて、意外なことかもしれませんが海外で知り合った日本人との関係も特殊な深い繋がりとなることが多いようです。

グローバル化時代の中で海外留学を通して国際感覚を肌で感じることは大きな意味があるように思います。徳島大学医学部もこれまで以上に積極的に海外留学を支援するとともに、新しい国際交流の芽を探し、育てていきたいと考えています。

## 目次

## CONTENTS

巻頭言	1	各賞受賞者	6
文部科学大臣表彰科学技術賞の受賞		寄附講座 地域脳神経医療学分野 紹介	7
受賞課題：慢性炎症の病態解明とその克服を目指した研究	2	学遊抄	7
国際連携大学院共同学位プログラムについて	3	数字で見る医学部	10
オープンキャンパス報告	4	新任教職員ご挨拶	11
学生委員会から	5	新任准教授紹介	12
教務委員会から	5	医学部行事予定	12
徳島医学会報告	6	編集後記	12

## 文部科学大臣表彰科学技術賞の受賞

### 受賞課題：慢性炎症の病態解明とその克服を目指した研究

大学院医歯薬学研究部生体防御医学分野 教授 安友康二

このたびは、文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）を賜り大変光栄に思っております。関係の方々に、あらためて御礼申し上げます。

今回の受賞対象となった研究は、「慢性炎症の病態解明とその克服を目指した研究」です。医学部だよりは、徳島大学の学生さん、保護者の皆様、医学部を志望されている高校生の皆さんも読まれるということで、下記に、できる限り平易な表現でその研究内容を記載いたします。

「炎症」はローマ時代からその特徴が定義づけられた生体反応の一つで、医学用語ではありますが日常生活でも耳にする単語だろうと思います。炎症は病気の一つととらえられがちですが、本来は生体にとって必要な応答であり、炎症を誘導することによって微生物など体にとって不都合な物質を排除する役割があります。しかし、過剰な炎症や不可逆性の線維化などが引き起こされた場合には、体にとって不必要な反応、つまり病気になる場合があります。炎症が不必要にかつ慢性的に持続する病態を慢性炎症と表現し、慢性炎症は膠原病、がん、糖尿病など様々な疾患の素地や進展因子になることが分かっています。それでは、正常応答としての炎症と、異常な炎症の違いを決めている因子は何でしょうか？異常な炎症が引き起こされた場合に、それがどうして慢性的に持続する場合があるのでしょうか？異常な炎症応答を引き起こしているどの経路を制御すれば、膠原病、がん、糖尿病などの疾患発症を抑制できるのでしょうか？残念ながら、そのような問いに対して、未だに明確な回答が得られていないのが現状です。そこで、私たちはヒトの炎症病態を引き起こすことに関与する遺伝子群を見出すことができれば、それらの問いの解決に繋がると考え、遺伝性炎症性疾患の原因遺伝子を見出す研究を行ってきました。さらに、私たちは、原因となる遺伝子の異常がどのように炎症病態に関わるかについて、動物モデルを樹立することにより詳細な解析を進めています。その結果、これまでに未発表も含めると、7種類の原因遺伝子を同定することに成功しています。一つだけ例を挙げますと、発熱、脂肪組織の炎症、部分的な脂肪萎縮、肝臓・脾臓の腫大、などを特徴とする原因不明の炎症性疾患の原因遺伝子として *PSMB8* を発見しました。*PSMB8* の異常によって細胞内の不都合なタンパク質を除去する役割を持つプロテアソームが機能低下し、その結果として全身に炎症病態が持続することが明らかになりました。我々の発見前から、プロテアソームの細胞における機能はよくわかっていたのですが、その異常がこのような多彩な疾患を引き起こしているということは全く想

定されておらず、その発見から炎症を引き起こすこれまで知られていなかった経路が明らかになりました。この病気は我々の発見を契機として、世界中から同様の症状を呈する症例が報告され、現在は PRAAS という疾患名がつけられて、疾患概念が確立しています。遺伝性疾患は極めて稀少ではありますが、一つの遺伝子の異常によって疾患が発症することから、その原因遺伝子の同定研究は、遺伝子と病気の関係性に対して極めて明確な回答を与えてくれます。また、遺伝性疾患の原因遺伝子同定研究は、PRAAS の発見に代表されるように、細胞レベルの研究や動物モデルの研究からは推定できなかった、特定の分子の疾患における役割を明らかにすることにも繋がるがあります。今回の受賞は、これらの一連の成果を評価していただきました。

新型コロナウイルスのパンデミックによって、医学研究体制の脆弱性が顕在化したと同時に、mRNA ワクチンの開発により基礎医学研究の重要性も再認識されました。我々も、免疫学者として研究のあり方を再考する機会になりました。研究の主題について大きく方向を変えるわけではありませんが、我々の研究グループでは、今回の受賞を一つの契機として、「慢性炎症」および「免疫学」という研究領域において、よりいっそう重要な研究課題、そして解決が難しいと思われる課題に取り組んでいこうとしています。そして、そのような基礎医学研究の成果を、疾患の本質的な理解とその克服に結びつけたいと考えています。



# 国際連携大学院共同学位プログラムについて

大学院医歯薬学研究部看護管理学分野 教授 谷岡 哲也

## はじめに

徳島大学大学院保健科学研究科生涯健康支援学領域では、外国連携大学と結んだ学術交流に関する協定書に基づき、共同して、それぞれの大学に所属する学生が本研究科及び外国連携大学の学位を取得できる国際連携大学院共同学位プログラムを開設しています。

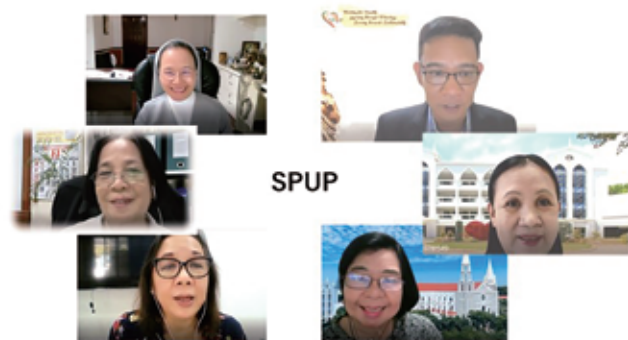
本プログラムの学生は、両大学の指導教員の指導のもと、両大学から博士の学位（保健学）および PhD in Nursing（看護学博士）の取得を目指します。外国連携大学としては、シリマン大学大学院看護学博士課程（フィリピン）とセントポール大学フィリピン（SPUP）大学院看護学博士課程と協定を結んでいます。

このコースの入学試験および入学後の授業はすべて英語で行われます。シリマン大学で、看護学博士号を取得するためには60単位のコースワークおよび論文研究、また、SPUPで看護学博士号を取得するために66単位（2022年からは48単位）のコースワークおよび論文研究を必要とします。

2022年3月1日に、SPUPと徳島大学の大学間協定更新のための調印式をオンラインで実施しました。その内容をご紹介します。

## オンライン調印式

SPUPからは、Sister Mercedes Ang 学長、Agripina B. Maribbay 副学長、Inicia C. Bansig 大学院研究科長、Anunciacion T. Talosig 保健学部長、Ma. Elizabeth C. Baua 大学院コーディネーター、Jeremy Godofredo Morales 国際部長が参加しました。



一方、徳島大学からは、苛原稔 前医歯薬学研究部長、赤池雅史 前医学部長、安井敏之保健科学研究科長、ロクシン・ロザノ名誉教授、近藤和也保健科学研究科教育・研究委員会委員長、奥田紀久子看護学系主任、谷岡哲也保健学科国際交流委員会委員長が参加しました。

最初に、SPUPのSister Mercedes Ang学長より、ご挨拶がありました。

「本日、徳島大学およびSPUPの関係者が集まり、バーチャル調印式を開けることを大変嬉しく思います。歓迎の言葉として、徳島大学とSPUPとの適切な連携が構築され、継続・発展することを強調したいと思います。今年は、共同学位プログラムにSPUP教員のAllan Paulo Lim Blaquera氏が入学しました。彼は、このプログラムを修了するために鋭意努力することと思います。また、このプログラムは人間性志向の共同学位プログラムであり、徳島大学との共同研究が進み、その成果として医療と看護の発展に寄与することを期待します。徳島大学は研究大学であり、先進的なテクノロジーを用いて研究を行っています。今後、徳島大学とSPUPとの共同研究がさらに進んでいき、科学の発展に貢献できるような研究成果を得ることを祈っております。そして、近い将来徳島大学の皆様をSPUPにご招待したいと思います。本日は、ありがとうございます。」

その後、調印式を実施し、各参加者が祝辞を述べました。



最後に徳島大学の谷岡哲也保健学科国際交流委員会委員長より、「SPUPと徳島大学で看護学の博士号と保健学の博士号を取得することは、国際的に評価される教育プログラムであり、この協力関係が、国際共同研究と教育の成果に前進させるものであり、さらに、両大学の連携を深めていきたい」と述べ、オンライン調印式を締めくくりました。

## おわりに

本プログラムに入学が認められた外国連携大学の学生は、徳島大学の正規学生として入学することができます。現在シリマン大学とSPUPからそれぞれ1名の大学院生が徳島大学に留学して研究しています。

日本人でこのコースに入学した人はまだいません。シリマン大学もしくはSPUPに正規学生として入学し、このコースを英語で修了することは、日本人にとっては、ハードルが高いと思います。しかし、学部学生のうちから英語で医療や看護を学習する習慣を身に付け、このコースに進学する学生が出てくるよう期待しています。



## オープンキャンパス 報告



### 医学科

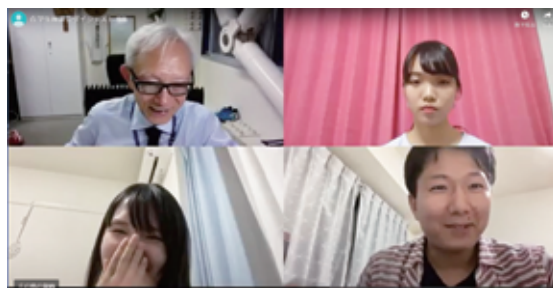
令和4年度の医学科のオープンキャンパスは新型コロナウイルス感染症の拡大により、昨年、一昨年に引き続いてWEBにて実施することとし、7月15日に医学部のホームページで公開しました。

最初に西岡安彦医学部長と橋本一郎医学科長のご挨拶を掲載しました。医学部の長い歴史、蔵本地区の充実した施設環境等について説明がありました。次の医学科概要説明のあと、恒例となった模擬授業では、これまでWEB版オープンキャンパスで好評を得た心臓血管外科の秦広樹教授と脳神経外科の高木康志教授の授業を掲載しました。低侵襲の最先端手術、外科医の医療において果たすべき役割・キャリアパス等が理解できる内容となっていると思います。その後、昨年、一昨年の新しい企画である在校生及び卒業1年目の卒業生による各座談会を掲載しました。この座談会により医学科の教育の手厚いサポート、徳島で学生生活を送ることの魅力等を再認識できるものと思います。模擬授業を担当いただきました両教授と、司会を務めていただいた歴代の医学科入試委員長である米村重信教授、和泉

唯信教授に感謝申し上げます。

今回の取組みによって、医学科では将来医師として多方面で活躍できる資質を身に付けることができる教育環境が整備されていることを少しでも感じていただければと思っています。気軽にアクセスしていただき、興味のある内容からご覧いただければと思います。最後になりましたが、多くの学生の皆さんが日本、四国、徳島の将来の医療を担うべく本学を目指していただければと期待しています。

(医学部入試委員長(公衆衛生学分野 教授) 森岡久尚)



### 医科栄養学科

令和4年8月4日に2年ぶりに医科栄養学科オープンキャンパスを対面形式で開催しました。参加者は高校生等138名、同伴者95名でした。

感染対策に留意しながら下記のプロプログラムに沿って医科栄養学科の紹介を行いました。

#### プログラム

- 9:00～ 9:30 受付(大学案内等資料配付)
- 9:30～ 9:35 医科栄養学科長挨拶
- 9:35～ 9:40 医科栄養学科紹介
- 9:40～10:00 ミニ講義「スポーツ・リハビリの栄養学」  
臨床食管理学分野 大南 博和 助教
- 10:00～10:15 休憩
- 10:15～11:40 8～10人にわかれて学内施設見学  
栄養学科棟へ移動

#### 【同伴者向け企画】

- 10:15～11:40 同伴者向け入試説明会  
高等教育研究センター アドミッション部門  
関 陽介 准教授

ミニ講義では、医科栄養学科の教員により、実際の講義内容を高校生に分かりやすく紹介しました。8～10人にわかれての

学内施設見学では、医科栄養学科内を医科栄養学科の学生による案内により見学していただきました。参加した高校生等が施設見学をしている間に、高等教育研究センター アドミッション部門教員に、同伴者向け入試説明をしていただきました。質問等に随時答えながら、午前中にオープンキャンパスを終了しました。オープンキャンパスの様子は、一部ホームページに掲載する予定です。多くの受験生に興味を持っていただき、たくさんの方の志願があることを期待しています。

(医学部入試委員(予防環境栄養学分野 教授) 高橋 章)



### 保健学科

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、令和4年度の医学部保健学科のオープンキャンパスは、保健学科ホームページ内に動画を載せる形でのWEB開催となりました。保健学科における公開日(7月15日)から1カ月の動画再生回数は、保健学科3専攻(看護学、放射線技術科学、検査技術科学)あわせて1000回を超えており、既に多くの方々に視聴していただいております。

令和4年度オープンキャンパスWEB版の動画内容は、昨年度の内容を改良し、高校生と保護者の方々のご要望に沿った、より役に立つ情報を盛り込んでおります。保健学科を卒業後に取得可能な国家資格と、それぞれの専門職の役割をわかりやす

く説明しておりますので、将来の進路決定の参考にさせていただけると幸いです。また、徳島大学ならではの特色や強み、各専攻の授業内容や実習の紹介、大学4年間の学習スケジュール等についても具体的に説明しております。

さらに、対面でのオープンキャンパスが叶いませんでしたので、できるだけ徳島大学医学部保健学科での大学生活をイメージしていただけるように、施設や授業・実習の様子について、写真を用いてご紹介させていただいております。看護学専攻では、「大学に入ってから学習方法」等、在学生からのメッセージも載せておりますので、ぜひご視聴ください。

(医学部入試委員(子どもの保健・看護学分野 教授) 森 健治)

## 学生委員会から

医学部学生委員長  
(顕微解剖学分野 教授) 鶴尾 吉宏

医学部学生委員会は、10名の教授および准教授の委員から構成されており、医学科の基礎系から3名（鶴尾吉宏、富田江一、森野豊之）、臨床系から2名（秦広樹、大藤純）、医科栄養学科から2名（竹谷豊、濱田康弘）、保健学科から3名（森田明典、友竹正人、山下理子）の委員が担当しています。本年度の委員長は鶴尾吉宏が、副委員長は森田明典先生が務めています。この組織は、医学部と大学院における学生生活に関わる諸事項を審議して学生生活の支援を行っています。学生の修学指導はもちろん、学内外での課外活動の監督、奨学金貸与の選考や、表彰や懲戒に関する他のこと、身分異動、福利厚生、健康・保険や安全に関すること、進路、就職や留学、国際交流に関することなど学生生活に関係する多数の内容を扱っています。

この委員会の役割は、医学部の学生が上記の諸項目において安全で快適な学生生活を送ることができるように支援することです。学生生活において休学願や復学願の提出が必要な場合にも、その都度相談等に当たっています。但し、学生の非違行為が認められた場合には、学生委員会が事情聴取などを行い、学長に報告し全学の学生委員会で処分の量定をして懲戒などの厳しい判断が必要となる事例もあります。また、学生証を紛失した場合には再発行の手続きが必要となりますが、学生証は身分証明書であると同時に、学内のセキュリティ情報が入力されていますので、医学科の5年次からの臨床実習での病棟への出入りの際などに必須となります。紛失した後に速やかに届けられない場合には、再発行できない事態も生じますので、学生証の管理には十分な注意を払うようにお願いします。

本年度においても2年前から続いております新型コロナウイルス感染の拡大防止のため、医学部では遠隔授業による講義・実習等を継続して実施しなくてはならない状況にあり、学生の皆様には大変な負担を背負いながら学生生活を過ごしていただいております。全国的には、新型コロナウイルス感染に対して社会全体が柔軟に対応する雰囲気になってきておりますが、医学部の学生の皆様には、引き続き生活面で十分に留意していただき、新型コロナウイルスの感染予防のために、3つの密（密閉、密集、密接）の回避、感染地域への移動の自粛、会合などへの参加の自粛、課外活動の自粛、各自の感染対策（マスク着用、手洗い、うがいの励行）の徹底などを通じて、本学学生としての責任を自覚して節度ある行動をとっていただいております。感染予防のためのワクチン接種も進んでいますが、新型コロナウイルス感染の再燃が懸念されますので、学生の皆様には引き続き感染予防のための適切な行動をとっていただくようお願いいたします。また、学生の皆様には、大学内はもとより学外においても、医療関係者として将来社会で仕事をする使命を受けていることを常に自覚し、正しい倫理観と道徳心を持って行動するように心がけてください。

学生生活は自主・自立が基本であり、学生には自己責任が問われます。しかし、学生生活で困ったことが生じた場合には、医学部学生委員会の先生方ならびに学務課の学生係の担当者が相談に応じています。良い解決策が見つかるように協力いたしますので、気軽に連絡して相談に来てください。

## 教務委員会から

医学部教務委員長  
(疾患病理学分野 教授) 常山 幸一

医学部教務委員会は医学科（野間口、鶴尾、西村、常山、森岡、池田、佐田、西良、脇野、沼田、滝沢）、医科栄養学科（瀬川、赤川）、保健学科（岩佐、吉永、遠藤）、卒後臨床研修センター長（岩田）、医療教育開発センター長（赤池）、医学部教育支援センター（西田）、医学部学務課長（宮川）の20名の委員で構成され、教育系の各センターや学務課と協同で医学部の教育課程の編成や授業科目の履修方法、進級及び卒業の認定、留学や他大学等との授業科目の履修、授業概要の作成等、学生の学習に関する事項の助言指導を行っています。徳島大学医学部としてどのような学生（医師、管理栄養士、看護師、検査技師等）を育てるのか、というアウトカムを教員と学生の双方が共有し、実践できるよう教育をたゆまなく改善・実行していくのが教務委員会の役割であり、現在直面している教育に係る諸問題から、社会の要請に対応しうる将来的な制度設計まで多岐にわたって協議を行っています。教務委員会には、教養・基礎医学研究部会（野間口部会長）、臨床医学教育部会（脇野部会長）、全国共用試験 CBT・OSCE 部会（佐田部会長）、社会医学・臨床実習部会（沼田部会長）、卒業試験部会（滝沢部会長）、国試対策部会（西良部会長）の6つの部会があり、細やかな学生対応を行っています。令和4年度には

教務委員会の下部組織として、新たに Student Lab 部会が立ち上がりました。Student Lab 活動に携わる多くの先生方にご参画頂き、野間口部会長が中心となって、総合型選抜（四国研究医）学生や Student Lab の学生が研究に集中できる環境作りをすすめています。令和4年度には、これまで課外活動として行ってきた Student Lab 活動を単位認定する新たな制度がスタートしました。低学年での Student Lab 活動で育まれた研究に対する興味が医学研究実習で大きく花開き、4年次終了後の MD-PhD コースや、医学部卒業後の大学院進学へのモチベーションに繋がることを期待しています。

現在、医学教育は卒前・卒後を通じた連続性・一貫性のあるシームレスな教育への転換途上にあり、教務委員会でも新しい制度への対応が課題となっています。昨年は、臨床実習期間の延長に対応するため、卒業試験の統合化を実施しました。CBT や OSCE などの共用試験が医師国家試験の受験資格要件に変更されるなど、今後も様々な変革が想定されます。教務委員会では、アウトカムの達成のみならず、学生さんの負荷の軽減も両立できる最適な方法を探っていきたいと考えています。

# 徳島医学会報告

## ■ 第265回徳島医学会学術集会(令和4年度夏期)

法医学分野 教授 西村 明 儒  
脳神経外科学分野 教授 高 木 康 志

第265回徳島医学会学術集会は、令和4年7月31日(日)に徳島県医師会館を会場に開催された。今回の大学側の担当は、法医学分野 西村 明儒教授、脳神経外科学分野 高木 康志教授が務めた。前回と同様に、新型コロナウイルス COVID-19の感染対策を講じての開催となった。対面形式のポスター発表は行わず、講演は、十分な感染対策のうえ、県医師会のネットワークを通じたWeb配信とした。ポスター(音声入り)は、オンデマンド形式でホームページ上に2週間公開し、徳島医学会賞および若手奨励賞の審査を行うこととした。会場では、教授就任記念講演として、産科婦人科学分野 岩佐 武教授による「生殖内分泌に関するこれまでの研究と今後の目標」、徳島大学病院安全管理部 池本 哲也特任教授による「医療安全について-培ってきたもの、これから培っていくもの-」、徳島大学病院 ER 災害医療診療部 板垣 大雅特任教授による「肺および横隔膜保護的な視点からみた新たな人工呼吸戦略」をご講演いただいた。西岡 安彦医学部長、齋藤 義郎県医師会長のご挨拶の後、第48回徳島医学会賞及び第27回若手奨励賞授与式が行われ、引き続き徳島医学会賞受賞記念講演として、徳島大学大学院医歯薬学研究部予防医学分野 Tien Van Nguyen 先生による「Association of metabolic syndrome and metabolically unhealthy obesity with cancer mortality: Results from a prospective cohort study in Japanese

population」、徳島県鳴門病院リハビリテーション技術科 島田 祐希先生による「COVID-19治療後患者に対する廃用リハビリテーションの重要性」をご講演いただいた。続いて、公開シンポジウム「脳卒中・循環器病を防ぐために」では、徳島大学病院脳神経外科学からは島田 健司講師に「脳卒中と循環器病克服5ヵ年計画」を、徳島大学病院 脳卒中センターからは兼松 康久准教授に「徳島県循環器病推進計画の中での急性期脳卒中診療の取り組み」を、臨床神経科学分野からは山本 伸昭特任講師に「脳梗塞急性期治療」を、徳島大学病院循環器内科からは門田 宗之特任助教に「心不全診療の現状と今後の地域連携」を、ご講演いただいた。また、法医学分野から西村 明儒教授が「被災地における突然死について」を講演した。以上、徳島県で行われている最先端の医学研究やCOVID-19感染症に対する医療活動、ならびに「健康寿命の延伸等を図るための脳卒中、心臓病その他の循環器病に係る対策に関する基本法」をふまえた疾病予防対策等について、学ぶことが多い学会であった。

本学術集会の開催にあたり、徳島県医師会、徳島医学会事務局、関係スタッフの皆様およびご参加、ご協力いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

(文責：法医学分野 教授 西村明儒)



### ◆◆ 各賞受賞者 ◆◆

■ 第264回徳島医学会学術集会(令和4年2月20日開催)において、第48回徳島医学会賞及び第27回若手奨励賞の受賞者が選考されました。

## 第48回徳島医学会賞

Tien Van Nguyen (Department of Preventive Medicine, Tokushima University Graduate School of Biomedical Sciences)  
「Associations of metabolic syndrome and metabolically unhealthy obesity with cancer mortality: Results of prospective cohort study in Japanese population.」

島田 祐希 (徳島県鳴門病院 リハビリテーション技術科)  
「腰部脊柱管狭窄症患者における立位脊椎アライメントと大腿四頭筋柔軟性の関係」

## 第27回若手奨励賞

石田 晃基 (徳島県立中央病院医学教育センター)  
「当院における新型コロナウイルス感染症院内クラスターの経験」

高原由実子 (徳島大学病院卒後臨床研修センター)  
「HIV 感染症および後天性免疫不全症候群患者の臨床的特徴と今後の課題」

## 寄附講座 地域脳神経医療学分野 紹介

大学院医歯薬学研究部地域脳神経医療学分野 特任教授 高木 康志(併任) 特任助教 三宅 一 央

地域脳神経医療学分野 (Community Medicine for Neurosurgery) は、愛媛県四国中央市にある社会医療法人石川記念会 HITO 病院からの寄附講座として2021年より開設されました。特任教授に高木康志(併任)、特任助教に三宅一央が担当しています。

徳島大学脳神経外科は動脈瘤やもやもや病、脳動静脈奇形といった脳血管障害や、脳腫瘍、てんかんの外科、脳深部刺激による定位脳手術において全国有数の施設となっています。これらの疾患については、徳島大学病院で集中的に治療を行い、そ

の後のリハビリテーションやフォローアップを HITO 病院で長期的に行う必要があります。HITO 病院への診療支援を行うことで円滑な治療体制を整えつつ、四国中央市への地域医療貢献を担います。それに伴い、地域医療に参加する脳神経外科医の養成・教育や、脳神経外科学の疫学、診断、外科治療に関する研究を行います。また徳島大学脳神経外科と HITO 病院にて協力しながら、3D を用いた画像補助や3D モデル作成による手術支援を行っています。

HITO 病院においてはスマートフォンを利用したオンライン遠隔診療についても積極的に取り組んでいます。徳島県西部から四国中央市の医療圏は山間部に属することもあり、冬場など季節によっては病院受診が困難になる傾向があります。家族構成や疾患の内容によっては患者本人が動けず、予定通りに受診ができないこともよくあります。近年の COVID-19 流行の影響

もあり、遠隔診療はこれまで以上に必要性が高まっています。

これからの時代に適した、よりよい医療を開発提供できるように取り組んでいきます。

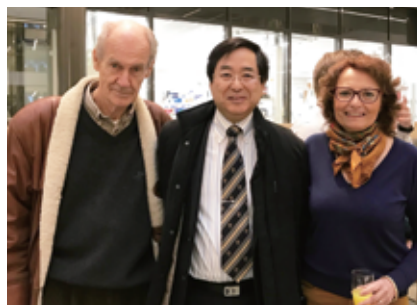


## 学遊抄 青春時代の留学のすすめ

顕微解剖学分野 教授 鶴尾 吉 宏

青春とはどの時期のことを指すのかは、その人ごとに判断が異なると思いますが、定年退職を迎える時期から考えますと、若かりし時期に自由に何でもできた頃を青春と呼んでもよいのではと思います。卒業後に大学に在籍して研究を続けている先生方の大半は若い頃に海外に留学して研究をして研鑽を積まれています。私も30数年前になりますが、大学院生の時期に海外留学する機会に恵まれました。解剖学教室に在籍し視床下部-下垂体系における神経内分泌について形態学的研究をしていたのですが、大学院に在籍中にスウェーデンのカロリンスカ研究所の組織学教室に1年半ほど留学しました。留学先は、Tomas Hökfelt 教授が主宰する研究室で、今では常識となっている1つの細胞内に2つ以上の複数の伝達物質が含まれている共存について精力的に論文を出していました。当然、研究室は大きくて、研究員もすごく多いと思っていましたが、間仕切りのない2つの小さな実験室と隣にある研究員室それと廊下をはさんで狭い教授室が隣の教授と間仕切りを隔ててあるような場所でした。アイデアと実行力があれば、研究は進むものであると感じたことも留学の大きな収穫です。若い頃は体力にも自信があるので、他の人の数倍は仕事をしたと思いますが、研究成果が出るようになると、教授や他の研究者との会話も増えてどんどん研究も進むようになり、楽しい充実した留学生活を過ごすことができました。留学では、研究はもちろんですが、日本では味わうことができない異文化を体験することも貴重な経験となります。市内へは研究室がある建物の横からバスが出ていて、研究の時間を都合すれば世界一流のオペラや音楽などを楽しむことができました。スウェーデンは、白夜で知られていますように、夏は日が暮れるのが遅く、朝のごく早朝から夜は8時を過ぎても明るい日々が続きます。アフターファイブの時間を実感したのもこの頃でした。そして、スウェーデンのストックホルムで1番に思い浮かぶのは、12月のノーベル賞の授賞式でしょう。私も留学2年目に授賞式に出席できました。授賞式は市中央にあるコンサートホールで行われ、その後に市庁舎にて

晩餐会が開催されます。医学生理学賞はカロリンスカ研究所の教授が選考委員となり、毎年受賞者を決めています。留学中の1年目はEGF、NGFの発見者リタ・レーヴィ・モンタルチーニとスタンリー・コーエン、2年目は抗体の多様性を解明した利根川進先生でした。受賞者は、受賞式の前にカロリンスカ研究所の講堂で記念講演を行うことになっており、現在は新しいAula Medica という銀色の外観の大ホールで行われ講演会後のパーティーも開催されますが、当時は学生食堂と同じ続きのそれ程大きくない階段状になったホールで、私も含めて観衆はギューギュー詰めで聴講していました。当時は、分野ごとにレンガ張りの建物があり、学生は講義ごとに建物を移動し、研究室も分野ごとの建物に分散していましたが、現在は、Aula Medica の横にある研究棟 Biomedicum に集約されており、Hökfelt 教授も80歳を過ぎてもなお Histology 部門の教授として4階にある研究室で、研究を継続されています。当時、私の周囲にいた同年代の大学院生(現在は Neurotoxicology 部門の教授 Sandra Ceccatelli や Microscopic Anatomy 部門の教授 Björn Meister) や研究者も、現在は全員教授となりカロリンスカ研究所を含めて世界中で活躍されています。青春時代に海外に留学して異文化を体験して研究の醍醐味を味わうことはその後の人生での進む方向に大いに影響を及ぼします。皆さんも是非とも青春時代に留学を経験してください。



数年前に訪問した研究棟 Biomedicum にて撮影(中央が筆者、左に Tomas Hökfelt 教授、右に Sandra Ceccatelli 教授)

## 学遊抄

## Time flies

予防医学分野 教授 有澤孝吉

私は、信州大学医学部で6年間の大学生活を送り、卒業後、環境医学・予防医学の道に進むことになった。郷里の富山医科薬科大学で4年間、長崎大学医学部ではボストンの1年をはさみ、16年間お世話になった。対馬のカドミウム汚染地域や対馬・上五島のHTLV-1流行地域のフィールド調査を行う中で疫学を勉強しなおす必要性を痛感し、1995年からハーバード大学公衆衛生大学院に留学し、Master of Scienceの学位を取得した。多くの課題があり、文献やテキストを読み、レポートを提出し、試験を受ける生活であった。週末に妻と二人の子供と一緒に郊外の大規模ショッピングモールへ行ったり、外食に出かけるのが唯一の息抜きであった。1学年に数百人の大学院生が世界各国から集まっており、世界的に有名な教授の講義を受けられる環境は一種のカルチャーショックであった。この一年間の経験により、研究者としての基盤が強化され、また、栄養疫学、数理統計学や臨床研究のための回帰分析の単位を取得したことは、後に徳島での研究に役立った。



Nancy Mueller 教授 (Academic advisor、左) と筆者



コメンズメント (1996.6、筆者中央)

2004年3月に徳島大学に着任した。最初の大学訪問時に、当時の曾根三郎医学部長から、予防医学分野を立て直して欲しいといわれたことを記憶している。任期の前半は環境省主催のダイオキシン類の人への蓄積量調査に関わるようになった。当時、血中ダイオキシン類の測定は非常に高価であったが、2700人を超える人数の調査が行われた。その中でデータのとりまとめを担当することになり、11編の論文を発表することができた。Environmental Health Perspectives に発表した論文は、ダイオキシン類の総毒性等量とメタボリック症候群との関連についての世界で最初の論文となり、これまで140回以上引用されている。2008年からは生活習慣病予防の分子疫学研究である、日本多施設共同コホート (J-MICC) 研究の徳島地区調査を開始した。県内の健診施設、事業所を回り、またチラシを徳島市内全域で配布し、協力者を募集した。遺伝子解析を含む調査への説明と同意を得ることは非常に時間がかかり、また人口の少ない県での協力者募集は苦労が多かった。2013年までベースライン調査を行い、現在も追跡調査を継続し、全国の参加施設と共同で論文を発表している。J-MICC 研究は、最近がん罹患の追跡データが使用できる状況となり、本格的な解析はこれからである。

最後に、教育・研究の場を与えていただきました徳島大学医学部の関係者の皆様、ご協力をいただきました教職員、共同研究者ならびに研究協力者の方々にこの場を借りて深謝申し上げます。

## 学遊抄

## 深く考え、熱く語る

血液・内分泌代謝内科学分野 教授 安倍正博

私は卒業後当大学第一内科に入局し、当時の教授であられた齋藤史郎先生から病態を深く考える研究の姿勢、また松本俊夫前教授からは病態を探究するための基礎医学の重要性を教えて頂きました。齋藤先生は、医学の知識に加え広い教養を持つことの大事さを常々言われており、とても尊敬できる先生でした。当時の第一内科では臨床面は深くできましたが、研究面は上下関係の厳しい窮屈な雰囲気でした。しかし、齋藤先生の後任として赴任されました松本先生により雰囲気が大きく変わりました。松本先生は研究者の自発性を重んじられており、自分自身の意見を言うこと、激しく議論することを求められました。松本先生との研究ミーティングは、真剣な厳しい議論と宴会がセットになっており楽しいものでした。個室のある居酒屋で、毎週研究ミーティングをして頂きました。お酒を飲みながら研究の夢をみんなで熱く語ったことを思い出します。このような楽しくも厳しい研究の雰囲気は、松本先生が企画し始められた、複数の施設から異なった分野の若手研究者が一堂に集う寺子屋形式の「瀬戸内カンファレンス」という研究会で多いに味わうことができました。この会では上下関係のない活発な質問が続き、夜を明かし研究の話を深めることができ、国内外のたくさんの研究者との出会いを持つことができました。このことは現在の私の大きな財産になっております。そしてなによりリーダーは、人を集めるという人間としての力が必要であるということを学びました。

最近雑多な業務に埋没し、ガラガラとした熱いものを感じに

くくなっているように思います。齋藤先生や松本先生の教えである、「深く考え、熱く語る」ことが学問、研究の基本ですので、これからも若い先生と熱く自由に語る時間を持ち、新しいものへ挑戦したいと思います。



私は学位も持たず、研究実績がほとんどないまま、米国テネシー大学に留学しました。米国では窮屈で自主性のない日本での日常から解放され、「自由」を心から感じたことを思い出します。齋藤史郎先生(中央)が留学先の Alan Solomon 先生(右)の研究室を訪問して下さいました。左端の私は当時30歳。

学遊抄

徳島大学医学部入学47年目～すべてに感謝

泌尿器科学分野 教授 金山 博 臣

昭和51年4月に徳島大学医学部に入学し、昭和57年3月に卒業するまでの6年間は、夢のような歳月でした。クラブ活動は、柔道部と釣り部に所属しました。柔道部ではあまり誉められた部員ではなかったのですが、合宿や遠征など、楽しい記憶がたくさんあります。釣り部でも、遠征や釣り大会開催など、こちらも楽しい思い出です。釣りでは友人達と愛媛県に遠征したり、山奥の湖でキャンプをしたりしました。釣ってきた魚を皆で料理をして宴会をすることもありました。関東在住の友人達は、コロナ前は毎年徳島に釣りに来て、民宿で宴会をしたり、釣った魚を我が家で料理をして宴会したりと、旧交を温めていました。学生時代の友人は本当に気が置けません。ところで、勉強のことはあまり記憶にないのですが、再試は何度も受けて、どちらかというと落ちこぼれでした。なんとか留年せずに卒業でき、国家試験もなんとか合格できました。泌尿器科に入局後は徳島・高知・愛媛の関連病院で研修した後、平成元年に大学に戻り、香川教授の指示により酵素科学研究センター・酵素病理学部門（市原 明教授・田中啓二博士）で2年間研究に従事し、基礎研究の面白さを教えていただきました。研究の成果を初めて国際学会で発表する機会を得てスペインに行ったことは至極の経験でした。学会発表の後、初代の黒川教授、2代

目の香川教授、大学および同門の先生方と共に美術館や遺跡、宮殿、教会などを訪問することができ、夢のような思い出です（写真1）。その後、香川教授の指導のもと、教育・研究・診療に邁進し、米国ヒューストンのMD アンダーソン癌センター（Prof. Fidler）に留学する機会も得ました（写真2）。図らずも平成16年4月には3代目教授を拝命し、なんとか今日まで教室を運営することができました。その間、女性泌尿器科外来の開設、腎移植の導入、ロボット支援手術の導入、小児泌尿器科の充実、多くの治験実施、学会の主催等、色々なことができました。何とかこれまで務めることができたのも、香川教授はじめ教室員の皆様、同門の皆様、医学部・病院の皆様、今まで出会ったすべての方、関わりのあったすべての出来事のおかげです。心より感謝申し上げます。



（写真1）平成3年 国際泌尿器科学会  
スペイン・セビリア（中央下が私）



（写真2）Prof. Fidlerと私

学遊抄

メリーランド遊学記

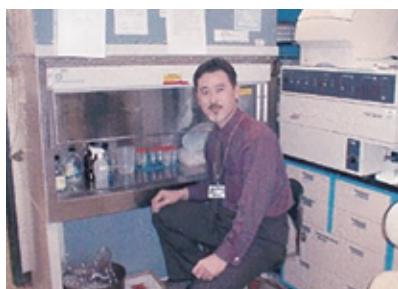
細胞・免疫解析学分野 教授 細 井 英 司

2000年5月～2001年2月までの10ヵ月間を文部省在外研究員として、Uniformed Services University of the Health Sciences (USUHS) に留学しました。USUHS (ユーシス) は米国連邦政府の健康科学大学で、陸・海・空軍所属の看護師、医師の教育施設と研究施設があり、アメリカ合衆国大西洋岸のワシントンD.C.に隣接したメリーランド州ベセスダにあります。研究施設では、私の研究室の上司である日本人以外は全てアメリカ人でしたが、目と鼻の先にはNational Institutes of Health (NIH) があり、多くの日本人研究者が集まっており、家族ぐるみの付き合いができました。

研究施設では麻酔科に所属し、悪性高熱症の診断法に関する研究をテーマとして、特に、「免疫細胞におけるリアノジン受容体（細胞間カルシウムチャネル）アイソフォームの発現」に関する研究を行いました（J Immunol. 2001）。研究テーマとしてはこれまでに行ったことない分野でしたが、遺伝子学的な解析法では日本での経験が役に立ち、大変興味深い研究をさせて

頂きました。ただ研究室のミーティングを除いては、ほぼ研究室で閉じこもり実験をしており、一部のメンバー以外とのコミュニケーションがなかったことが今となっては残念にも思います（写真1）。この留学では、研究だけでなくアメリカでの生活を堪能させて頂きました。子供たちは現地学校に通い、土曜日はワシントン日本語学校で日本語教育をうけ、親子ともども日本ではできない貴重な体験をすることができました。

メリーランドのドライバライセンスを取り、車を購入することで（写真2）、研究所への行き帰り、週末は車でハイウエーを飛ばし、遠くのモール、観光地、DCにあるナショナル・モール（スミソニアン博物館、美術館など）などを訪れることができました。NIHの研究者の3家族とそれぞれ車を走らせ、ニューヨークにあるブロードウェイでミュージカル鑑賞したことは思い出深い体験であります。短い留学期間ではありましたが、研究者としての経験、アメリカのカルチャー、今でも心に残る留学でした（写真3）。



（写真1）実験室にて



（写真2）1988年式キャデラック  
（アパート駐車場）



（写真3）USUHS 研究室のメンバー  
からの寄せ書き

# 数字で見る医学部

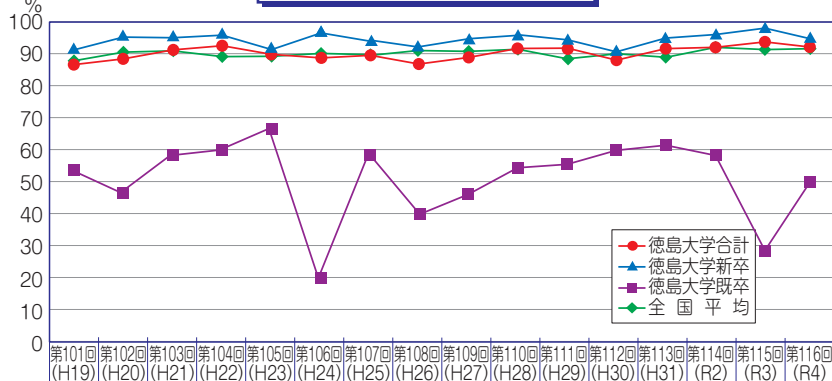
## ◆ 入学試験（医学・栄養・保健）

令和4年度 徳島大学医学部入学試験受験者・合格者数・入学者数調

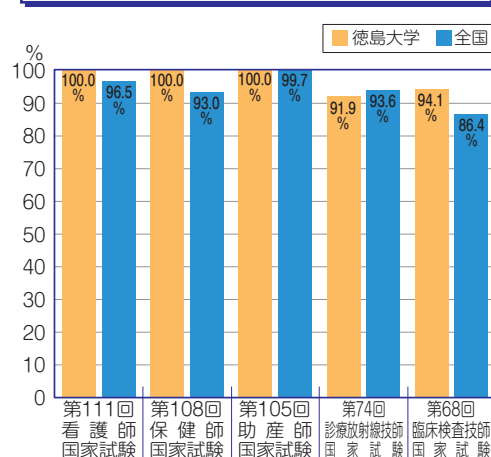
	定員	志願者	受験者	合格者	入学者	男	女	県内	県外	その他	現役	一浪	その他
医 学 科	114	283	215	116	114	69	45	31	83	0	76	30	8
医 科 栄 養 学 科	50	98	86	51	50	5	45	16	34	0	47	3	0
保健学科	看護	70	342	223	76	72	2	51	21	0	71	1	0
	放射	37	299	178	41	39	19	8	31	0	30	8	1
	検査	17	86	78	20	18	8	10	8	0	15	0	3

## ◆ 国家試験

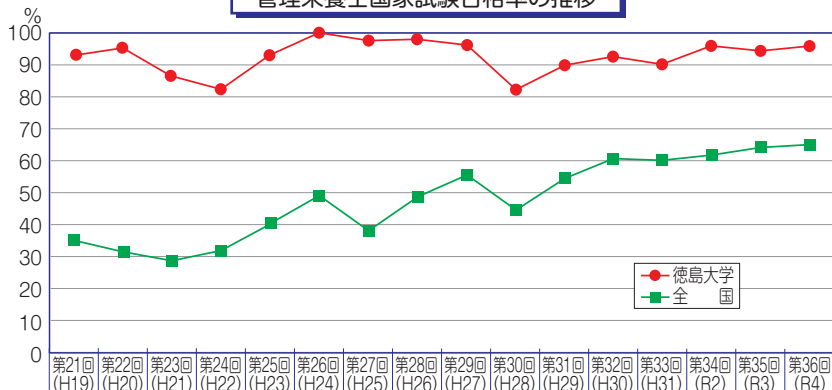
医師国家試験合格者の推移



保健学科 各種国家試験合格状況について



管理栄養士国家試験合格者の推移



## ◆ 科研費採択状況（医学部・病院の合計）

(令和4年7月1日現在)

研究種目名	平成29年度		平成30年度		令和元年度		令和2年度		令和3年度		令和4年度	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
基盤研究(A)	1	5,500	1	10,400	1	9,100	1	4,600	2	11,800	1	8,300
基盤研究(B)	13	41,600	12	49,200	13	64,900	13	50,600	14	57,200	15	72,400
基盤研究(C)	106	117,000	35	46,200	99	106,700	104	183,100	111	186,900	103	100,400
挑戦的萌芽研究	10	11,800	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
挑戦的研究(開拓)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
挑戦的研究(萌芽)	2	4,800	2	3,600	2	4,800	5	8,900	4	12,900	2	2,400
若手研究(A)	4	16,300	4	17,300	2	7,000	0	0	0	0	0	0
若手研究(B)	50	68,500	27	38,600	7	4,100	0	0	0	0	0	0
若手研究					56	77,800	68	130,400	55	99,200	50	57,500
研究活動スタート支援	2	2,100	3	3,400	1	1,430	5	5,500	0(※)	0(※)	0	0
新学術領域研究	3	25,800	4	46,000	2	22,200	0	0	0	0	0	0
学術変革領域研究(A)											1	9,200
学術変革領域研究(B)							0	0	2	17,300	1	6,900
特別研究促進費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
特別研究員奨励費	3	2,500	6	4,800	5	4,300	4	3,900	4	3,600	5	4,219
国際共同研究強化	0	0	1	1,900	1	4,000	1	4,100	1(※)	3,800(※)	0	0
合 計	193	294,800	95	221,400	189	306,330	201	391,100	193	392,700	178	261,319

※挑戦的研究(開拓)及び挑戦的研究(萌芽)については、平成29年度からの新規種目。

※若手研究(A)を基盤研究に統合し、若手研究(A)の公募を停止。それに伴い、若手研究(B)の名称を「若手研究」と改名。

※「研究活動スタート支援」及び「国際共同研究強化」については、継続分のみ記載。

※学術変革領域研究(A・B)については、令和2年度からの新規種目。

## 新任教職員ご挨拶



令和4年4月1日付けで小児科学分野の教授を拝命いたしました。徳島大学を卒業した後、同小児科に入局し四国内の関連病院で専門研修を行なっております。小児腎病態の研究により学位を取得し、さらに深く掘り下げるため米国に研究留学し、帰国後は本学で教育・研究・診療に従事しておりました。徳島大学病院小児科は徳島県だけでなく周辺の地域医療にも貢献しています。また小児科内でも腎臓、

### 小児科学分野 教授 漆原 真樹

循環器、血液腫瘍、アレルギー、内分泌代謝、神経、新生児のサブスペシャリティを有しており、それぞれ専門性の高い診療や研究をしております。これからも小児医学の発展のために医学部教育、専門研修指導でリサーチマインドを持った人材を育成していきます。さらに質の高い専門性を強く押し出した医療を提供していきたいと考えております。今後どうぞよろしくお願い申し上げます。



令和4年4月1日付けで食品栄養学分野の教授を拝命いたしました。教育・研究環境に恵まれた徳島大学で教育・研究活動に従事できることは、大変光栄なことで嬉しく思っています。私は、秋田県横手市の出身で平成13年に東北大学大学院農学研究科博士後期課程を修了後に東北大学と名古屋大学で博士研究員として研究に従事してきました。平成17年からは、大阪府立大学大学院生命環境科学研究科（現大阪公立大学農学研究科）で教員として採用され、

### 食品栄養学分野 教授 赤川 貢

教育・研究活動に17年間従事しました。これまでは主に食品の健康機能性に関する研究に取り組んできました。今後はこれまでの研究を発展させるとともに、独自性を追求した食品栄養学研究を展開していきたいと考えております。微力ではありますが、研究・教育活動を推進し、次代の食品栄養学を担う管理栄養士・研究者の育成に貢献できるよう努めて参る所存です。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



令和4年4月1日付けで地域呼吸器・血液・代謝内科学分野の特任教授を拝命いたしました。この場をお借りいたしまして、謹んでご挨拶申し上げます。私は平成5年に徳島大学を卒業後、当時の第三内科に入局し、徳島大学および関連医療機関にて勤務してきました。専門分野は呼吸器悪性腫瘍ですが、呼吸器疾患全般の診療・研究・教育に取り組んでおります。今回、徳島大学および本寄附講座の設置元である高松市立みんなの病院に赴任させていただく

### 地域呼吸器・血液・代謝内科学分野 特任教授 埴淵 昌毅

こととなりました。微力ではございますが、徳島大学（呼吸器・膠原病内科学分野、血液・内分泌代謝内科学分野）と連携して診療活動を行うとともに、高松市地域において医学生・研修医および専門的診療能力を有する医師の育成を行い、呼吸器疾患や内分泌・代謝疾患の病態解明および治療に関する研究に尽力してまいります。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



令和4年4月1日付けで蔵本事務部長を拝命いたしました。蔵本事務部は5課、現在84名が在職しています。大きな事務組織のまとめ役という大役を任せられ、大変身が引き締まる思いです。医学部は総務課、学務課の職員36名で、教育・研究支援業務、管理運営業務等を、先生方と常に連携し協働しています。社会の変化、時代の変化に伴い、業務内容も高度化し専門性が求められることが多くなっています。そのために事務職員ひとりひとりが個々の能力やスキルをいかに迅速に習得できるかが重要です。また

### 蔵本事務部長 福川 美千代

膨大な業務をいかに効率よく行うことができるか、課題はたくさんありますが、医学部のさらなる発展のために少しでもお役に立てるよう、先生方、職員と協力しながら日々精進したいと考えております。私の好きな言葉は「ありがとう」です。物は言いよう、考えようといひます。言い過ぎたり、言葉足らずだったり失敗することも多々あり、反省することばかりですが、常に感謝の気持ちを忘れず、プラス思考で頑張りたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



令和4年9月1日付けで、耳鼻咽喉科学分野教授を拝命いたしました。私は平成9年に徳島大学を卒業後、耳鼻咽喉科学教室に入局し、徳島大学および関連施設で研鑽を積んでまいりました。また留学先の米国NIHではマスト細胞のシグナル伝達に関する研究を行いました。専門は鼻科学と頭頸部腫瘍学であり、アレルギー性鼻炎の病態解明と新規治療法の開発を行っています。またアレルギー疾患医療拠点病院である徳島大学病院の総合アレルギーセン

### 耳鼻咽喉科学分野 教授 北村 嘉章

ター長として、徳島県のアレルギー診療レベルの向上と一般市民への啓発に取り組んでいます。今後は、基礎および臨床研究の発展、ロボット手術などの世界標準治療の提供、次世代の研究者と指導者の育成などを通じて、徳島大学と四国の医療の発展に貢献することができるよう全力で邁進する所存です。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 新任准教授紹介



異動年月日	異動内容	氏名	所属
R 4 . 4 . 1	採用	西 庄 俊 彦	脊椎関節機能再建外科学分野
R 4 . 4 . 1	採用	河 野 豊	実践地域診療・医科学分野
R 4 . 4 . 1	採用	山 下 一 太	地域運動器・スポーツ医学分野
R 4 . 4 . 1	昇任	佐 藤 正 大	呼吸器・膠原病内科学分野
R 4 . 4 . 1	昇任	板 東 孝 枝	療養回復ケア看護学分野

## 医学部行事予定 (令和4年10月～令和5年3月)

### 令和4年

- 10月3日(月) 後期授業開始  
 11月1日(火) 第117回医師国家試験願書受付 (11月30日(木)まで)  
 試験日: 2月4日(土)～2月5日(日)  
 11月2日(水) 徳島大学開学記念日  
 11月11日(金) 第106回助産師国家試験願書受付 (12月2日(金)まで)  
 試験日: 2月9日(木)  
 第109回保健師国家試験願書受付 (12月2日(金)まで)  
 試験日: 2月10日(金)  
 第112回看護師国家試験願書受付 (12月2日(金)まで)  
 試験日: 2月12日(日)  
 11月14日(月) 第37回管理栄養士国家試験願書受付 (12月2日(金)まで)  
 試験日: 2月26日(日)  
 11月24日(木)～25日(金) 入学試験(学校推薦型選抜Ⅰ)  
 11月26日(土) 入学試験(総合型選抜)  
 12月14日(水) 第75回診療放射線技師国家試験願書受付 (1月4日(木)まで)  
 試験日: 2月16日(木)  
 第69回臨床検査技師国家試験願書受付 (1月4日(木)まで)  
 試験日: 2月15日(水)  
 12月25日(日)～1月7日(土) 冬季休業

### 令和5年

- 1月14日(土)～15日(日) 大学入学共通テスト  
 1月28日(土)～29日(日) 大学入学共通テスト(追試験)  
 2月11日(土) 入学試験(学校推薦型選抜Ⅱ)  
 2月25日(土)～26日(日) 一般選抜(前期日程)  
 3月12日(日) 一般選抜(後期日程)  
 3月16日(木) 医師国家試験合格発表  
 3月23日(木) 卒業式・大学院修了式  
 3月23日(木) 診療放射線技師及び臨床検査技師国家試験合格発表  
 3月24日(金) 助産師、保健師及び看護師各国家試験合格発表  
 3月24日(金) 管理栄養士国家試験合格発表  
 3月25日(土)～31日(金) 学年末休業



徳島大学は、学校教育法第109条第2項の規定による「大学機関別認証評価」を受け、「大学評価基準を満たしている」と認定されました。  
(令和2年3月24日)

#### ●認証評価機関

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構

#### ●認証期間 7年間

## 編集後記



本号は、安友教授の文部科学大臣表彰科学技術賞受賞という喜ばしい記事と国際連携大学院共同学位プログラムという国際的な博士課程構築に関する記事から始まります。学遊抄では今年度で退任される5人の教授に若かりし頃の留学体験を寄せていただきました。先生方の楽しそうな、開放されたような笑顔が印象的です。コロナ禍が収束すれば、この笑顔に刺激されて医学部から多くの学生や若き研究者が海外留学されるといいですね。そして新任教授、新任特任教授のご挨拶では、医学部に吹き込む新しい息吹を感じることができます。コロナ禍はついに終わりの始まりが見えてきたのではないのでしょうか。長い助走の後には大きなジャンプがある、ポストコロナの来たるべき躍進に向けてみんなで頑張りましょう。

(医学部広報委員会 委員長 橋本一郎)

発行 徳島大学医学部 編集 医学部広報委員会  
 広報委員 橋本一郎(委員長)、森岡久尚、安友康二、高木康志、竹谷 豊、今井芳枝、福川美千代

本誌へのご意見・ご要望は、(総務係)E-mail: [isysoumu1k@tokushima-u.ac.jp](mailto:isysoumu1k@tokushima-u.ac.jp) までお願いします。  
 なお、写真は執筆者各位の提供により掲載しています。

Tel: 088-633-9116 Fax: 088-633-9028 URL <https://www.tokushima-u.ac.jp/med/>

医学部ホームページはこちらから →

